

演題番号：

演題名：イヌの白内障乳化吸引術 47 症例の術後成績の比較検討

発表者氏名：○上岡尚民、上岡孝子、柴崎桃子

発表者所属：うえおか動物病院

1. はじめに：犬の白内障手術は近年、器機や技術の進歩に伴いその適応が拡大し症例数も増加している。今回我々は、白内障罹患犬において超音波水晶体乳化吸引術（以下 PEA）を行った 44 頭 47 眼における術後成績を検討した。
2. 材料および方法：2005 年 9 月から 2009 年 3 月までに当院にて PEA 手術を行った症例 44 頭 47 眼（雄 16 頭 18 眼、雌 28 頭 29 眼）である。PEA 手術時の平均年齢は 4.9 ± 2.86 歳。若年性白内障（以下 JC）が 28 例（平均 3.2 歳）、老年性白内障（以下 SC）が 17 例（平均 7.8 歳）、糖尿病に併発した白内障が 2 例（平均 9 歳）であった。身体一般検査、血液検査および各種眼科学的検査を行い、各検査で問題が無く、犬の性格も考慮した上で適応なものに対し手術を行った。手術はイソフルラン吸入麻酔下にて水晶体乳化吸引術を行い、犬用眼内レンズを挿入した。術後最低 3 ヶ月間経過観察を行い、眼科学的所見より 0、1、2、3 点の 4 段階の当院独自のスコアリングを行い、白内障のタイプ別および術前の水晶体誘発性ぶどう膜炎（以下 LIU）の有無によるスコアの比較を行った。
3. 成績：術後視覚良好な症例（スコア 3、2）は全体の 79%、視覚はあるが後発白内障や不整瞳孔など経過観察が必要な症例（スコア 1）は 6%、視覚喪失した症例（スコア 0）は 15%であった。SC に比較して JC はスコアが悪い傾向にあった。また、術前 LIU（-）例の方が LIU（+）例に比べて成績がよく、また LIU（+）の方が（-）のものに比べ有意に視覚喪失をしていた。視覚喪失した 7 症例の原因は、続発性緑内障（A・C・スパニエル）2 例、眼内出血（M・シュナウザー）2 例、網膜剥離（T・プードル）2 例、慢性ぶどう膜炎（ヨークシャー・テリア）1 例であった。うち、眼内出血、網膜剥離例は術後ぶどう膜炎などの前兆がなく突然発症し、またそれらは全て多頭飼育の環境下であった。
4. 考察：今回の術式および術前術後の内科療法において 85%の視覚が改善し維持できている。一方、15%の症例で視覚喪失に至ったが、その要因として術前 LIU の有無が重要であった。また、各種の術後合併症の起こる可能性は特定犬種によって起こりやすいことが示唆され、飼育環境によっても予後が左右されると考えられた。これらのことを踏まえて手術および術後管理を行えば、より満足度の高い結果が得られると思われる。